

称名寺の二つの「蓮如上人御旧蹟」碑

西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



▲蓮如上人御開創五百年記念「蓮如上人御旧蹟」碑から山門を見る



▲山門前の「牛魂碑」を転用した蓮如上人御開創五百年記念「蓮如上人御旧蹟」碑



▲下高野街道前(称名寺旧参道)の「蓮如上人御旧蹟」碑(南新町2丁目)

更池地区・下高野街道前に建立 食肉産業・牛の霊を祀る牛魂碑

南新町二丁目には、西本願寺を本山とする浄土真宗本願寺派の称名寺が建っています(歴史ウォーク148)。山門から東に延びて旧参道が古道の下高野街道に向かっていますが、そこに「蓮如上人御旧蹟」と刻まれた立派な角柱の石碑が見られます。側面に「報恩山称名寺」の山号・寺号があり、裏面に「進納者」として十名の方々の名が二段に記されています。いつ建てられたのかは、年月がありませんが、木南康昭住職によると、寄進者である門信徒の和讃講の二、三名の方が戦前に亡くなっておられることから、昭和前半ごろの建立と考えられます。

蓮如は、室町時代の本願寺八世で応永二十二年(一四一五)に生まれ、長禄元年(一四五七)、父の存如を継いで門主となりました。鎌倉時代、親鸞が浄土真宗を開いて以後、存如のころには本願寺の宗勢が衰えていました。そこで、蓮如は文明年間(一四六九、八七)、河内・大和や北陸地方など各地の布教につとめました。現在、松原市域には、浄土真宗(西本願寺・東本願寺)寺院が三十数か寺ありますが、この時の蓮如の教化によって、開かれたと伝える寺が数か寺見られます。称名寺は、江戸時代、河内国丹波郡更池村の地にあり、江戸時代前半までにお堂が建っていました。寛文八

年(一六六八)に西本願寺より本尊の阿弥陀如来像を与えられ、貞享四年(二六八七)には称名寺の寺号も授けられています。門信徒である更池地区の人々は、称名寺を浄土真宗中興の祖といわれる蓮如ゆかりの地として誇り、顕彰につとめたのです。

その上、称名寺には下高野街道沿いの石碑とは別に、山門の手前右側に、もう一つ巨大な「蓮如上人御旧蹟」碑が建立されています。同碑は裏面に刻まれた銘によると、昭和五十年(一九七五)六月上旬に建てられました。称名寺の「佛教共信会一同」と「佛教婦人会一同」が寄進しました。蓮如が、各地の教化につとめていた文明七年(一四七五)から五〇〇年になる昭和五十年を「蓮如上人御開創五百年記念」として祝い、碑が完成したのでした。

石碑は、自然の花崗岩を利用して、その巨石の中央表面・裏面に整形された加工石に文字をはめこむ形をとっています。基礎石となっている巨大な石は、縦に据えられています。文字が入られる前、もともとは石碑の真向かいの現駐車場の場所に置かれていました。それも、縦ではなく、側面を地面につけ、横向きにされていたのです。

さらに、遡ると、巨石は昭和二十年代ごろまでは、今の新町公民館(南新町一丁目)と長尾街道・西除川に架かる布忍橋西詰の南五〇メートルの所にありました。この地は更池地区北部

になります。更池地区南部の現在の南新町南公園(南新町三丁目)の地には、大正一五年(一九二六)から平成元年(一九八九)まで、六十数年の長きにわたって、旧布忍村宮を引き継いだ松原市宮の屠場が所在していました(歴史ウォーク246)。

屠場では牛と豚の屠業が行われ、この地域の食肉産業を支えていました。このため、ここで働く人々を中心に死んだ牛の霊を祀る「牛魂碑」建設が計画され、昭和前期ごろには、布忍橋南方に建立されていたのでした。その土台石がこの「蓮如上人御旧蹟」碑として転用されたものなのです。「牛魂碑」は昭和二十年代、先述のように布忍橋の南から称名寺に移されましたが、その際、現在の巨石を残して壊されたようです。

昭和二十九年生まれの木南住職は幼少のころ、横に伏せられ、あたかも牛が寝をべって休息している形の巨石の上に乗って遊んでいたと話しておられました。更池地区の人々も、この巨石を牛石に見立て「牛魂碑」として利用したのもかもしれません。

生きとし生きる全ての生命を尊厳し、牛の命も仏に帰依できると信ずればこそ、仏縁が結ばれるとして称名寺境内に建立されたと思われる。阿弥陀如来の救いをあらためて心に深く味わわせていただけるよう、蓮如への畏敬の気持ちを「牛魂碑」に託したと、私は思っています。